

ちょっと読んでみませんか（令和三年御会式）

第61話『開目抄（かいもくしょう）』 ～本源寺副住職 本間健司

昨年度の御会式プリントでは、御会式法要のなかで必ずお読みする『報恩抄（ほうおんしょう）』という御文章について取り上げました。日蓮聖人が、師僧である道善房（どうぜんぼう）の御魂に対して報恩のために書かれた御文章でしたが、その御文章を私たちがお読みすることで、【南無妙法蓮華経】という“宝物”を私たちに授与して頂いた「御恩の想い」を日蓮聖人の御魂に捧げることの大切さについて書かせて頂きました。毎年、御会式の際にはぜひ想い出して頂ければ幸いです。

さて、皆さんは、明治末期に出版された『代表的日本人』（内村鑑三著）という書物をご存知でしょうか。この本は、日本文化や思想を世界に伝えるために様々な言語に翻訳し出版され、『武士道』（新渡戸稲造著）・『茶の本』（岡倉天心著）と並んで、世界に知られる名著とされています。アメリカ大統領のジョン・F・ケネディもこの書に大きな影響を受けたそうです。

この本では、誇り高き五人の日本人を選び抜き、各々の人生について詳説されています。ですが、なんとその五人のひとりに【日蓮聖人】が選ばれているのです。日蓮聖人についての著者の説明を紹介してみましよう。

〈恐れをもつとも知らぬ人間、この人の勇氣は、自分がブツダの、この世への特別の使者であるという確信から生じたものでした。（中略）法華経の伝道者たる能力においては、この人物は天地全体に匹敵するほど重要でありました。〉

〈私ども日本人のなかで、日蓮ほどの独立人を考えることはできません。実に日蓮が、その創造性と独立心とによって、仏教を日本の宗教にしたのであります。他の宗派がいずれも起源をインド、中国、朝鮮の人にもつのに対して、日蓮宗のみ純粹に日本人に有するのであります。〉

傍線部にあるような法華経を弘める「使命感」や「覚悟」「独立心」が日蓮聖人という人物を偉人たらしめているわけですが、その意思を聖人みずから明確に表明したのが、今回のテーマである『開目抄（かいもくしょう）』という書物でした。

『開目抄』は、佐渡島に流罪となつた日蓮聖人が、寒風や降雪が吹き込むあばら家の中で、迷い悩み自問自答した末に、遂に自らの《宗教的使命》に“開眼”した過程を詳細に記した重要な御文章で、時は一二七二年(文永九年)、聖人51歳の著作です。

以下は、日蓮聖人の覚悟を表明された象徴的な箇所、聖人の魂の叫びが七五〇年の時を超えて私たちに迫ってくるようです。

善につけ悪につけ法華經をすつる、地獄の業なるべし。本願を立つ。日本國の位をゆずらむ、法華經をすてて觀經等について後生を期せよ。父母の首を刎ねん、念仏申さずわ。なんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用いじとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。

我日本の柱とならむ。我日本の眼目とならむ。我日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず。

私なりに現代語訳をしてみます。

善意からでも悪意からでも、法華經を捨てることは地獄に墮ちる罪業となります。そこで私は、過去世から使命として抱いてきた誓願をいま改めてここに立てます。

「法華經を捨てて觀無量壽經(浄土教の經典)等を信じ来世の救いを願うならば、日本の権力を譲りましょう。」という誘惑や、または「念仏を唱えないならば、貴様の父母の首をはねてしまおう!」という脅しなど多くの大難があつたとしても、智者が私の見出した教義を論破しない限りは、決して他の教えを用いることなどあり得ません。それ以外の大難は、風の前のチリのようなものです。

(その後は訳すまでもないですよね…)

最後の、聖人自身が日本の柱・眼目・大船となつて、苦しみにあえぐ日本の民を救い導くんだ! という強い誓いは【三大誓願】と呼ばれ、日蓮聖人を象徴する言葉ともなっています。

ちなみに、本源寺本堂の北側に立つ六角堂内には先代住職が彫刻した日蓮聖人立像が安置されていますが、聖人の側に掲げられた【三大誓願】が、御題目を唱える私自身に強い覚悟を迫ってくるように感じる時があり、ドキッとしてしまいます。

とはいっても、日蓮聖人の御教えを受け継ぐ現代の私たちが、聖人の【三大誓願】のような強い覚悟を持つのは困難なのはいうまでもありません。

しかし、聖人が自らの《使命》に向き合ったその想いは、私たちも見習うことが出来るのではないでしょうか。

《使命》は「命を使う」と書きますが、私たちが様々な御縁を得てこの世に生を受けた大切な命を何のために使っていくのか。日蓮聖人は【三大誓願】を高らかに叫びながら、私たちに「命を大切に使いなさい」と励ましてくれているような気がするのです。

今年の日蓮聖人の七四〇回目の遠忌であり、また御降誕されて八〇〇年の聖年でもあります。“日本を代表する”偉人を宗祖と仰げることにあらためて誇りと感謝の念を抱きながら、自らの《使命》（＝命の使い方）に思い巡らせてみることも、日蓮聖人への報恩になるはず。

強く、優しく、人間らしく、自らの人生に向き合われた日蓮聖人ですから…

合掌 南無妙法蓮華經